

白老地域に伝わるルウンペの伝承とその変遷について

On the Tradition and Evolution of *Ruunpe* handed down in the Shiraoi Region

八幡巴絵 (YAHATA Tomoe)

国立アイヌ民族博物館学芸主査 (Senior Fellow, National Ainu Museum)

要旨

北海道白老町内には、複数のコタン（集落）¹⁾があり、そこではルウンペと呼ばれる木綿の衣服がつくられ着用された。「白老（しらおい）コタン」と呼ばれる集落では、明治期から観光事業でアイヌ文化を紹介していくなかで、現在に至るまでにさまざまな模様や形態のルウンペが伝承されてきている。

本稿では、白老地域に伝承されるいわゆる「ルウンペ」について、国立アイヌ民族博物館の収蔵資料を中心に、その製作者たちや着用者、さらにその遺族などの関係者へ聞き取り調査を行い、そこからルウンペをめぐる白老地域の特徴、そして旧アイヌ民族博物館（通称ポロトコタン）²⁾を中心とした継承活動、そして衣服の変遷について考察を加えた。

また、製作者のアイデンティティや、地域で守られるルウンペが現在どのように製作されているかを述べる。

キーワード：白老地域、ルウンペ、木綿衣、ユニフォーム、地域性、ポロトコタン

Abstract

In Shiraoi, Hokkaido, there were several *kotan* (villages) in which cotton garments known as *ruunpe* were made and worn. In “shiraoi kotan,” a variety of patterns and forms of *ruunpe* have been passed down to the present day, as Ainu culture has been introduced to people visiting the region through tourism projects since the Meiji period.

This article focuses on the *ruunpe* tradition of the Shiraoi region and the items in our museum’s collection, as well as interviews with the families of the makers and wearers of these garments among others. From this survey, we considered what characteristics are considered to be typical of the “*ruunpe* of the Shiraoi region” and how they were inherited through the activities of the former Ainu Museum (otherwise known as Porotokotan). The influence of changes in clothing culture are also considered.

The article describes the identities of the makers and how *ruunpe*, which are considered to have been protected by the region as a whole, are being produced today.

Keywords: Shiraoi region, *ruunpe*, cotton garments, uniforms, regional characteristics, Porotokotan

1. はじめに

筆者は、平成 18 (2006) 年より旧財団法人アイヌ民族博物館の伝承課にて、白老地域の古式舞踊を諸先輩方から指導を受けつつ、儀礼や舞踊の際に着用するルウンペについて教わった。そこで伝え聞いたことを白老地域のルウンペの変遷としていつかまとめたいと考えていた。そのため、地域の衣服文化として製作者や製作品の情報を、様々な形で残しておくべきと考えた。

本稿は、令和 4 (2022) 年 3 月 15 日 (火) から 5 月 15 日 (日) まで国立アイヌ民族博物館特別展示室にて、第 2 回テーマ展示「地域からみたアイヌ文化展 白老の衣服文化」で紹介した内容を基礎としている。当展示会では、白老地域で製作または着用されたルウンペに焦点をあて、衣服や装身具を 70 点展示した。白老の衣服を一堂に会して展示し、白老の衣服文化に影響を与えたと考えられる時代の動向を示すことで、衣服の地域性が形成されていく過程を示す内容とした。

アイヌ民族の衣服におけるルウンペは、白老をはじめとした胆振地方や渡島地方などで広く着用されている。これまでに白老地域で収集された衣服や、写真資料などから、ルウンペと呼ばれる木綿衣が多く着用されてきたことが先行研究でわかっている。

一般的に広く普及している書籍の『増補・改訂アイヌ文化の基礎知識』では、ルウンペを以下のように説明している。

北海道の太平洋沿岸の噴火湾から、湾を出て室蘭、幌別、白老にこの衣服が残っています。ルウンペは、木綿の古裂(ふるぎれ)をつなぎ合わせて、その上に、絹、サラサ、メリンス、絹のなかでも小袖の日本刺繍のある物、木綿などの色物の古裂を細く切り、これを切伏している、極めて手のこんだ衣服です。ルウンペも地方によってかなり文様が異なります。

ルウンペの古いものでは江戸時代中頃のものもあり、縫っている糸や刺繍をしている糸にイラクサを使っているものがあります(一般財団法人アイヌ民族博物館 2018: 88)。

白老地域では伝統儀礼や伝統舞踊などの場面において、アイヌ民族の男女の盛装としてルウンペが着用さ

れる。そのため現在も町内ではアイヌ民族の女性を中心に盛んに製作し、着用される衣服である。現在、製作者が参考しているのは、各地の博物館や資料館に収蔵されている「白老地域から収集されたことが判明している木綿衣」である。その大半は、ルウンペと呼ばれる木綿衣である。筆者が常勤している国立アイヌ民族博物館でも、昭和期以降に収集されたルウンペが数多く収蔵されている。

平成 24 (2012) 年以降、筆者はポロトコタンに在職していた職員へ聞き取り調査³⁾を行い、その中で製作に携わったことのある人、着用していた人から、彼等が伝承してきたルウンペについて調査した。

本稿では、白老地域に伝承されるいわゆる「ルウンペ」について、国立アイヌ民族博物館の収蔵資料を中心に、その製作者たちや着用者、さらにその遺族などの関係者へ聞き取り調査を行い、そこからルウンペをめぐる白老地域の特徴、そして旧アイヌ民族博物館(通称ポロトコタン)を中心とした継承活動、そして衣服の変遷について考察を加えた。また、製作者のアイデンティティや、地域で守られるルウンペが現在どのように製作されているか述べる。

なお筆者が常勤している国立アイヌ民族博物館の展示室では、ルウンペ等木綿製の衣服に関する表記方法は、「衣服(木綿)」と統一されている。しかし先行研究や聞き取り調査では「木綿衣」と表現されていることから、本稿ではルウンペの日本語表記を「木綿衣」で統一する。木綿以外に樹皮製や獣皮製など、複数の素材が使用されている場合は「衣服」と表記する。

2. 白老の衣服文化に関する記録や先行研究

2.1. 大正までのアイヌ民族の衣服の記録

白老は古くからアイヌ民族が居住する地として知られていた。北海道におけるアイヌ民族の衣服に関する古い記録は、16 世紀後半まで遡る。その中にはイエズス会のルイス・フロイスらによる動物の毛皮をつかった衣服に関するものがある。また木綿の衣服に関する記録については、17 世紀前半には、東インド会社の貿易船「クローブ号」指揮官であるジョン・セーリスによるものがある。遅くともこの時期までには、和人社会や大陸から入手した素材を使い、衣服をつくる風習がアイヌ文化に存在していたと考えられる。また、イエズス会のジロラモ・デ・アンジェリスにより、さまざまな色の細長い布片を装飾する衣服も記録

として残されている。この記録は、北海道太平洋沿岸の噴火湾地域に伝わる古いタイプのルウンペを連想させる(児玉 1941)。

白老地域のアイヌの衣服に関する国内の記録は、文化6(1809)年に松前奉行支配調役・荒井保恵による『東行漫筆』が知られている。シラライ場所の売り買いの記録をみると、生鮭・干鮭、棒鱈、昆布、クマの毛皮やワシの尾羽などをアイヌ民族から買い入れ、その売り渡しの品物として、木綿の衣服に関する用布(和製布)、針(木綿針)、古手(古着)が含まれている(秋葉 1991: 41-42)。

白老地域の記録としては、大正期に初版が出版された『アイヌの足跡』がある。本書は、白老で満岡伸一⁴⁾(1882-1950)が当時のアイヌの伝統や風習、言語、生活について記述した書籍である。満岡は、当時の衣服について下記のように記してある。

(略) 今尚ほ熊祭り、葬儀等古来の儀式を行ふ場合は女はアツツシ又は木綿織に古来の縫模様を附したる着物を着け、男子は其上に父祖傳來の陣羽織を着しサパンペ(葡萄の木の皮を編みて作りたる輪の如き鉢巻の如きものにて盛装用の山高又はシルクハットにも比すべきもの)を戴くを常とす(満岡 1924: 8, 下線部筆者)。

満岡は、古来の儀式を行う場合は、木綿織に古来の縫模様がある衣服を着用していたことを記録しており、大正期の白老では、伝統的な模様が縫われた木綿衣を着用したことがわかっている。

2.2. 衣服の地域性に関する先行研究

白老地域の木綿衣、とくに地域性に関する研究は多くない。衣服の地域性に関する研究で白老地域が取り上げられているのは、1960年代以降となる。児玉作左衛門⁵⁾、児玉マリ⁶⁾を中心とした衣服や装身具関連の調査である。昭和43(1968)年に発表された「アイヌ服飾の調査」(児玉・伊東 1968)では野本イツ子、松永金太郎らへの聞き取り調査にて白老のルウンペについての記述がみられる。これは昭和39(1964)年7月とその後2回行われた調査にてまとめられたものである。

白老コタンのアイヌ衣服の現存しているものには、色裂置文衣即ちルウンペが多い。これは

男にも女にも好まれており、白老地方のアイヌ衣服の代表品と見るべきものであり、他の地方には非常に少ないものである。白老におけるルウンペの特徴は、裂片置文と切抜き文の組み合わせによる文様構成であり、その中心をなしているものは矩形または正方形の布による切抜き文である。この切抜き文はモレウ文⁷⁾系統の文様で表されることが多い。(中略) また身頃背面の文様は、上半部と下半部が必ず分離している。

ルウンペは本来は儀式用の晴着であり、帯をしめずに、はおるものである。現在では両脇に細紐をつけて軽く結んでいる(児玉・伊東 1968: 84, 下線部筆者)。

以上要するに白老地方のルウンペは、切抜き文と裂片置きの混合であり、両者の区別は、注意してみなければ識別できないような状態になっている(児玉・伊東 1968: 87)。

本研究では、児玉作左衛門が収集した資料をもとに、詳細に聞き取りを行っていることから、調査協力者からの詳細な情報が多く、今日まで白老でルウンペを製作している人たちの参考資料となっている。

昭和45(1970)年に出版されたアイヌ文化を網羅的に集成した『アイヌ民族誌』(アイヌ文化保存対策協議会編 1970)で、白老に伝承されている事項を記述している部分は、前述の「アイヌ服飾の調査」よりも少なくなっており、アイヌ衣服名称の地方差、アイヌ衣服模様の地方差の項目に各地域の中の一項目として書かれている。『アイヌ民族誌』における記述は、「アイヌ服飾の調査」に手をいれたものとなっており、大筋は変わらない。

要するに白老地方における色裂置文衣ルウンペの特徴は、裂片置き文と切抜き文の組み合わせによる文様構成であり、両者の区別は、注意して見なければ区別できないようなものが多い。文様の中心をなしているものは、矩形または正方形の布による切抜き文である。この切抜き文はモレウ文系統の文様で表されることが多い。(中略) また身頃背面の文様は、上半部と下半部が必ず分離している(アイヌ文化保存対策協議会編 1970: 243)

また、児玉マリは、昭和 61 (1986) 年発表した「木綿衣-ルウンペという晴着について」(児玉 1986) において、下記のように述べている。

(略) 白老のルウンペには次のような特徴がある。

(1) 背を上部と下部に分けて上部には、四角い色物の裂で切抜文様をつける。これは背縫いを中心に縦二つ折りにして、それを横に二つ折にして作る。四角の色物の裂の廻りを、テープ状の細い布で切伏をしている。背面の下部にも、上と同じような切抜文様をおいてある。

(2) これは衣服全部にあるわけではないが、身頃の丈の半分(腰のあたり)の場所に、全く異なった別布を前身頃から後身頃までいれている。これについては、古い衣服に後世の人が、布をたして丈を長くしたのだとか、衣服も文様のよいのを、再利用した結果だとかいろいろ考えることはあるが、結論らしきものは未だ出ていない。(児玉 1986: 18)

この後、白老地域の衣服調査には、平成 7 (1995) 年に発表された岡田路明 (1950-) による「アイヌの着物の地方的特色をさぐって-胆振西部地域製作の着物の所在調査-」(岡田 1995) がある。岡田が白老民俗資料館に在籍した昭和 52 (1977) 年から実施した調査である。渡島管内、胆振管内、石狩管内の博物館及びそれに相当する施設、白老町内の個人所蔵の衣服を対象とした調査をまとめたものである。その際、白老町内の 4 個人を対象として所在調査を実施している。この調査のなかで岡田は、「胆振地方西部におけるルウンペと呼ばれる着物の模様は、早い速度で伝播発展し、地方的特異性を変化させてきたといえる」と指摘している(岡田 1995: 9)。

児玉や岡田らの先行研究により、白老地域に伝わるルウンペの特性は、背中身頃の上下が分離し、全体的に細長いテープ状の布を直線的に縫いつけた模様と幅広の布を矩形または正方形に切り抜き縫いつけた模様で構成されることが指摘され、それが「白老地域の伝統的な衣服の特色」として一般化され、その認識は現在までに至っている。

3. 白老地域で伝承されるルウンペ

先行研究を踏まえ、当館収蔵資料を中心にしたルウンペの調査と聞き取り調査を行った結果、白老地域に関連するルウンペの中で、製作年代や製作者がおおよそ判明しているものを以下のように 3 つの時期に区分した。筆者が行った聞き取り調査で、資料館・博物館での伝承活動や普及事業等により、ポロトコタンを含む白老地域のルウンペの製作方法に変化が見られることから、資料館・博物館の建設年を基とする時期区分とした。

- ①白老コタン時代：明治時代から昭和 38 (1963) 年
- ②白老民俗資料館時代：昭和 39 (1964) 年頃から昭和 59 (1984) 年
- ③旧アイヌ民族博物館時代から現在：昭和 59 (1984) 年から令和 5 (2023) 年

3.1. 白老コタン時代：明治時代から昭和 38 (1963) 年

『白老町史』によると、明治以降、白老村はアイヌ民族の居住地区として広く知られるようになったという。大正初期からは、アイヌ民族の調査研究のため、学術研究者が各地から白老コタンに来村したと記述されている(白老町 1975: 708-709)。そこで、研究者や観光客などを受け入れるため、コタンの中に生活するための住居とは別に観光等を目的とした伝統的な茅葺きのチセ(家屋)が大正 8 (1919) 年までに建てられた(田辺 1984)。研究者をはじめとした来村者に対し、アイヌ民族を正しく認識させるために、熊坂シタツピレ、野村エカシトク、貝澤藤蔵、宮本イカシマトク⁸⁾がコタンの長老として説明にあたった。また、白老コタンの調査研究を行い、アイヌ民族と親交があった満岡伸一がその紹介にあたった。このとき、アイヌ文化研究者等への対応は、上記 4 名を中心としながら、彼等の妻や子どもたち、親戚や近所のアイヌ民族も行った。そこで土産物を販売するだけでなく、白老地域のアイヌ文化を紹介するために、特に衣服や装身具、さらに踊りを習得し披露するなどの取り組みがあった。

大正に入ってから、熊坂シタツピレと野村エカシトクは亡くなり、おおよそ大正 8 (1919) 年以降は、貝澤藤蔵や宮本イカシマトクらが中心となり、対応にあたったという。昭和 15 (1940) 年頃は、当時の戦時体制強化の影響で、観光客はしばしの間減って

しまったが、終戦後の昭和22(1947)年あたりからは国内外を問わず、観光客は増えたという(白老町1975)。昭和37(1962)年頃よりさらに増加し、昭和39(1964)年には56万人もの観光客が訪れるようになった(白老町1975)。



写真1 小学校の校庭で、観光客に輪踊りを披露しているようす
国立アイヌ民族博物館蔵(収蔵番号90051)

当時の白老コタンには、狭い住宅地のなかに観光用のチセや茅葺きの家屋が密接していたため、防災・生活環境上危険性が伴うことから、北海道庁から適切な場所に移設するよう強く要望があったという。これらを解消するため、白老町と白老コタンの関係者らが協議し、有識者の答申を経て、その結果として白老駅からおよそ800メートル北東に位置するポロト湖畔に移転が決定した。

当時のルウンペを知るために、国立アイヌ民族博物館収蔵のルウンペや木下清蔵⁹⁾の写真、観光はがきなどから、着用者、製作者を特定し、さらにその遺族や当時の状況を知っている人たちへ聞き取り調査を行った。この頃製作・着用されたルウンペは、各自が持ち寄っていたものがほとんどであり、ルウンペを製

作できない人は、周囲の製作者たちから借用していたことが判明した。

以上のように、時代背景を念頭に置き、白老コタンからポロト湖畔へ移転する前までのルウンペを古い順番から示し、解説していく。

3.1.1. 木村フジエ旧蔵のルウンペ

現時点で確認される白老地域で製作された一番古いと考えられるルウンペは、木村フジエ(1914-2006)がかつて所有し、着用したものとされている(写真3)。これは木村フジエの祖母が江戸後期に製作したとされる資料である。

衣服をみってみると、上半分と下半分の模様が腰のあたりで分かれて独立している。背中には、左右対称のモレウ(渦巻模様)を切りぬいた絹布が置かれ、イラクサ繊維から作られた糸で縫いつけ補強されている。またそのモレウはさらに直線的なテープ状の布で囲まれていることから、このルウンペは、ルウンペの代表的な特徴を備えている資料である。なお本資料は、昭和61(1986)年に白老町の有形民俗文化財に指定された。



写真2 写真3のルウンペを着用している女性
国立アイヌ民族博物館蔵(収蔵番号90048)一部拡大



写真3 木村フジエ旧蔵のルウンペ
国立アイヌ民族博物館蔵(収蔵番号10855)

3.1.2. 宮本サキが製作したルウンペ（1）

宮本サキ（1881-1957）は、宮本イカシマトクの妻である。宮本サキは、木下清蔵の写真や観光はがきから、さまざまなルウンペを着用していたことがわかる。その中でも写真4のルウンペを着用している機会が多く見られる。このルウンペは、大正から昭和にかけて製作されたものと推測できる。

このルウンペは、全体的に直線のテープ状の布を貼り付けて、模様を構成していることから、白老コタン

で多くみられる直線的なテープを多用し模様を構成している資料といえるだろう。着用の機会が多かったためか、全体的に擦れが目立っている。本体の擦れた箇所には裏面から別の木綿布を縫い付けて補修している。またテープ状の部分の損傷には、それ以上布が欠落しないよう、木綿の布で縫って補強している。この補修の仕方は、今後の衣服文化のなかで、ルウンペを長く着用するための工夫として参考になる資料と考えられる。



写真4 宮本サキ（中央女性）
国立アイヌ民族博物館蔵（収蔵番号 90175）一部拡大



写真5 宮本サキが製作したルウンペ 国立アイヌ民族博物館蔵（収蔵番号 10853）

3.1.3. 宮本サキが製作したルウンペ（2）

写真6のルウンペは、背面上半分や裾に、赤い木綿布で切り抜いたモレウ（渦巻模様）が施されていることに特徴がある。高い頻度で着用されたためか、破損部には裏面から木綿布で補修されている。写真7、写真8、写真9、写真10のルウンペは、岡田路明が白老地域の衣服の特徴について、1970年代に調査を行ったときの写真である。このとき、白老町内の複数の家系では、この衣服と同様に、赤い布を使ったモレウが施されたルウンペが伝えられていることが判明した。そしてその記録が岡田の退職後もポロトコタンに

残り、「白老地域のルウンペとは背中と裾の赤い布が施されていることである」との認識が形成され、それが現在まで白老町で伝わっていると推察される。さらに児玉マリの論文内で写真7、写真8、写真9、写真10のルウンペを白老のルウンペとして解説したことにより、その認識がさらに強まったといえるだろう（児玉1986）。

なお、岡田の調査当時は所蔵者の手元にあったルウンペだったが、筆者が2021年以降に行った所在調査では、これらのルウンペは白老町内で確認することができなかった。



写真6 宮本サキが製作したルウンペ
市立函館博物館蔵（収蔵番号 K-H13-347）



写真7 町内個人所有のルウンペ (1970年頃撮影)¹⁰⁾。写真提供：岡田路明



写真8 町内個人所有のルウンペ (1970年頃撮影)¹¹⁾。写真提供：岡田路明



写真9 町内個人所有のルウンペ
(1970年後半頃撮影)。写真提供：岡田路明



写真10 町内個人所有のルウンペ
(1970年後半頃撮影)。写真提供：岡田路明

3.1.4. 上野ムイテクンが製作したルウンペ

写真11は上野ムイテクン(戸籍名：フッチエトク)(1872-1964)が着用したルウンペである。ムイテクンが製作したルウンペや女性用鉢巻などは、幅広の布を縫い付けて、模様を切り抜く技法が多用されている。このルウンペも、背中と裾全体に同様の技法が使われている。ムイテクンは白老出身で、生活体験地も白老とされていた(『エカシとフチ』編集委員会1983:15)。これは、直系遺族から入手した除籍謄本の情報を基にして記載したと思われる。しかし、筆者が令和3(2021)年実施した直系の遺族らへの聞き取り調査では、ムイテクンの出生地および生活体験地に複数の情報があった。

- ①日高の厚賀出身で、結婚した明治24年までには白老に来ていた。(孫A)
- ②白老の出身とはあるが、日高の厚賀出身である。(孫B)
- ③白老の出身で、ルーツは日高の厚賀である。(曾孫B)

ここで共通しているのは、「日高の厚賀」という、現在の北海道沙流郡日高町厚賀町付近を指す言葉であ

る。日高地域では、白い布を全体的に切り抜いて模様をつくるカバラミツと呼ばれる木綿衣が伝わっている。カバラミツは、明治20年代に広幅木綿が売り出されていることから、それ以降に作り出された着物であるとされている(津田2019:69)。ムイテクンが、日高厚賀出身または日高厚賀のルーツを持っているとすれば、カバラミツに見られるような切抜き技法を若い頃に習得し、写真11、写真12、写真13などのルウンペや装身具の製作に活かしていったのであろうと考えられる。



写真11 上野ムイテクン 筆者蔵



写真12 上野ムイテクンが製作したルウンペ 国立アイヌ民族博物館蔵(収蔵番号60501)



写真13 上野ムイテクンが製作したルウンペ 国立アイヌ民族博物館蔵(収蔵番号10854)



3.1.5. 野本イツ子が着用したルウンペ

野本イツ子(1892-1978)は、前掲の上野ムイテクンの長女である。児玉の「アイヌ服飾の調査」では、木綿衣本体の生地が違うが、筆者が所蔵している写真14と同じルウンペが掲載されている。図版に「白老、ルウンペ1、野本イツ女製作」とあり、野本イツ子が製作したとされている(児玉・伊東1968:83)。国立アイヌ民族博物館所蔵60503のルウンペは、写真15のルウンペである。この資料の情報は、素材と寸法と「昭和30年 野本イツコ氏」というものがある。写真14と写真15のルウンペは同じ模様であるが、本

体に使われている生地に違いがある。おそらく、イツ子が同じ模様のルウンペを複数所有していたためだと考えられる。しかし直系の遺族らへの聞き取り調査によると、イツ子は衣服等の製作はしておらず、母親のムイテクンや親類らが製作していたルウンペやチヂリなどの木綿衣を着用していたという。そのため写真14、写真15のルウンペはイツ子が製作したのではなく、所有し着用したものであると考えられる。木綿衣を着用している写真では、写真14や15のルウンペがよくみられる。このルウンペも、ムイテクンが製作した写真12、写真13と同じように、全体的に幅広の

布を切り抜く技法が多用され、腰の辺りで模様が分かれる配置となっているため、上野ムイテクンが製作したルウンペである。



写真14 野本イツ子
筆者蔵



写真15 上野ムイテクンが製作し、野本イツ子が着用したルウンペ
国立アイヌ民族博物館蔵 (収蔵番号 60503)



3.1.6. 森竹竹市が着用したルウンペ

写真16はアイヌ民族の三大歌人のひとりである森竹竹市(1902-1976)が着用したルウンペであり、竹市の母の森竹オテエが製作した。森竹竹市は前述のムイテクンの甥である。

21歳で国鉄に入って以来13年奉職し、その後は自営業(漁業のち食堂経営)を経て昭和36(1961)年に昭和新山アイヌ記念館長、同40(1965)年にポロトコタン解説員を勤め、42(1967)年にはポロトコタンの中に設立された白老民俗資料館の初代館長を3年間勤めた後に退職した。森竹は、解説員としてアイヌ文化について解説する際には、ルウンペなどの木綿衣

を着用していた。

このルウンペは、一見すると直線的な模様が多いため、同じ幅の布を縫い付けてあるように見えるが、幅の広い布を縫い付けて模様を切り抜く技法を使い模様を構成している。竹市は児玉作左衛門の調査で、背中にある紫色でつくられた模様について、「数ある文様のなかで最も大切な模様であると両親から聞かされていた」(児玉・伊東1968:85)と説明した。このことから、白老地域では「背中の模様が大切である」との認識のもと、ルウンペの製作が行われていったと考えられる。



写真16 森竹竹市
国立アイヌ民族博物館蔵 (収蔵番号 90376)



写真17 森竹竹市が着用したルウンペ 国立アイヌ民族博物館蔵 (収蔵番号 60500)



3.2. 白老民俗資料館時代：昭和 39（1964）年頃 から昭和 59（1984）年

白老コタンの観光チセは、白老町と白老コタン関係者らが協議し、有識者の答申を経て、昭和 39 年（1964）年に現在のポロト湖畔に移転が決定した。これにより、本来のコタンから観光の空間が切り離されることとなった。翌年、白老コタンなどのアイヌ民族が中心となり、白老町だけでなく商工会議所や漁業組合、観光協会なども含めた白老観光コンサルタント株式会社が設立され、同社経営のもと「ポロトコタン」の営業を開始した。そこでは白老のアイヌの歴史や文化を紹介する白老民俗資料館をはじめ、茅葺きのチセを建設し、屋内外でアイヌ文化の解説を行い、チセに隣接した広場では白老で伝承された舞踊が披露された。ポロトコタンへ移転したことを契機として、白老の町全体で、アイヌ民族の有形・無形の文化財を収集保存し展示公開する新たな施設建設の機運が高まった。



写真 18 白老民俗資料館外観
国立アイヌ民族博物館蔵（収蔵番号 90257）

昭和 42（1967）年にポロトコタン敷地内に開館した白老民俗資料館では、館内の陳列品である展示備品としてのルウンペを含む木綿衣の製作がおこなわれた。また、舞踊を披露する職員が着用する衣装として、ルウンペが製作された。舞踊を披露する職員の中では、何らかの理由で、ルウンペが家系に伝わらなかった人が複数いた。そのような人たちへは、組織でつくられた衣装としてのルウンペが支給された。ルウンペを製作できる人たちは、ポロトコタンを運営する組織で、仕事として衣装製作ができるようになった。そのため、白老の木綿衣に関する情報は、ポロトコタンを運営する組織に集約された。その過程において、それまでのコタン（集落）におけ

る家族単位の「家系で伝承されたルウンペ」であったものから、組織単位の「白老地方という地域性を表すルウンペ」へと変化した。こうして白老という地域で取り組むアイヌ文化伝承のかたちがつくられた。

この章では、新しい施設となる旧アイヌ民族博物館が開館するまでのルウンペの伝承について述べる。

3.2.1. 松永金太郎着用・所有のルウンペ

松永金太郎（1907-1970）は、3.1.4. にて述べた上野ムイテクンの末子である。松永は若いころは漁師をしていたことから、伝統的な漁労についての知識や経験が豊富な人物だったという。後年は、松永レキコトムの名で、ポロトコタンの顔としてアイヌ民族の歴史や文化の解説を行ったり、儀式の際はコタンを代表する古老としてカムイノミ（神への祈祷）を行ったりしていた（財団法人白老民族文化保存財団 1982:4）。

白老民俗資料館が開館したばかりの時期は、解説員や踊りを披露する職員たちは、自前で準備したり、ルウンペを製作した人から借りたり譲り受けたりした衣服が着用されていた。松永も関係者らが製作したルウンペを複数着用していたことが、観光写真等の記録から判明している。

松永金太郎から収集し、国立アイヌ民族博物館が所蔵している衣服は、写真 20、写真 21、写真 22 の 3 点となっている。写真 20、写真 22 のルウンペは、直線的な模様が少なく、赤い布を使ったモレウを使った模様が少なく、社台コタンで製作されたルウンペの特徴を持つと推測される¹²⁾。



写真 19 松永金太郎（昭和 40〔1965〕年撮影）。
国立アイヌ民族博物館蔵（収蔵番号 90404）



写真 20 松永金太郎が着用したルウンペ 国立アイヌ民族博物館蔵 (所蔵番号 00250)



写真 21 松永金太郎から収集した木綿衣¹³⁾ 国立アイヌ民族博物館蔵 (所蔵番号 00251)



写真 22 松永金太郎が着用したルウンペ 国立アイヌ民族博物館蔵 (所蔵番号 00253)

3.2.2. 展示備品として製作されたルウンペ

白老民俗資料館の開館にあたり、白老町教育委員会が主体となって、白老地方のアイヌコタンなどで使用されてきた生活用具が展示目的で収集された。その一方で、実物は収集できないものの、その製作方法が伝承されているものは、展示備品として新規に製作された。展示備品として製作された衣服をモデルとし、ポロコタンの舞踊のための衣装が製作された。

この中心となったのは、近藤ノリ子 (1924-2017) である。近藤は、若い頃に和裁を習得し、手仕事がとても速いことで知られていた。写真 23 と 24 は、白老民俗資料館の展示備品として、松永金太郎が着用したルウンペ (写真 22) や、他のルウンペを参考とし、木綿で本体やテープ部分をミシン縫いにて製作し、その上から刺しゅうを施して完成した資料である。ここで注目される点は、和裁の要素である衿 (おくみ)、身

八ツ口、掛襟など伝統的なルウンペにないパーツが存在することである。和服と同じ形態のルウンペを着用するため、男女ともに和服の帯とおなじ幅の帯もしくは別布でアイヌ模様を入れた帯をするようになった。

ポロトコタンが開園した昭和40(1965)年以降、舞踊の踊り手の人数を増やしたことから、衣装としてのルウンペが大量に必要となった。しかし、衣服を製作する職員が少なかったことや、製作期間を十分に確保できなかったことなどから、ミシンを利用した大量生産が図られた。製作工程については、①衣服本体の仕立て作業、②直線状の布の貼り付け作業、③刺しゅう作業に分業された。近藤ノリ子は①、②の行程を引

き受け、その後、直線状の布の貼り付けまで終わったルウンペは、刺しゅうができる女性職員が総出で刺しゅうを行った。

ルウンペの製作の分業化は、衣服の模様の定型化を進展し、ポロトコタンの職員が、古式舞踊の業務だけに留まらず、衣服製作に広く参画できる結果となった。また、同じようなルウンペが複数できあがることから、着用者自身がルウンペに施す刺しゅうの一部分の色系を変えたり、刺しゅうの線を増やしたりするなど、着用者が一目みて自分が着るルウンペだとわかる工夫がこの時期に行われた。



写真 23 近藤ノリ子が製作したルウンペ 国立アイヌ民族博物館蔵 (所蔵番号 00244)



写真 24 近藤ノリ子が製作したルウンペ 国立アイヌ民族博物館蔵 (所蔵番号 00245)

3.3. 旧アイヌ民族博物館時代から現在：

昭和59(1984)年から令和5(2023)年

昭和51(1976)年、ポロトコタンを運営してきた白老観光コンサルタント株式会社が発展的に解散し、財団法人白老民族文化伝承保存財団が設立した。この財団では、白老地域のアイヌ民族が主導して収集品の調査研究事業や民具の複製品製作作業などを積極的に

展開した。事業の拡大に伴い、資料館の収蔵品も増加したため、新資料館の建設計画が持ち上がった。昭和59(1984)年、白老民俗資料館の名称も改め、アイヌ民族博物館が新しく開館した(写真25)。



写真25 アイヌ民族博物館開館(1984年)
国立アイヌ民族博物館蔵

ここでは、これまで調査研究の対象であった白老地域のアイヌ文化を越え、全道各地や樺太・千島のアイヌ文化、そしてアイヌ以外の北方民族の文化をも対象とし、アイヌの歴史や文化に関する学術的な拠点となっていった。また、資料館時代から使用されていたポロトコタンの名称も引き続き使用された。この時期、多くの来園者を集めたこともあり、「ポロトコタン」のイメージが定着した。平成2(1990)年には、白老民族文化伝承保存財団の名称を財団法人アイヌ民族博物館へと改めた。財団法人アイヌ民族博物館(旧アイヌ民族博物館)は、令和2(2020)年に開園予定の民族共生象徴空間の開設準備に伴い、2018年3月末日をもって閉館した。そして2年間の準備期間を経て、令和2(2020)年にウポポイ(大勢で歌うところ)という愛称がつけられた民族共生象徴空間が開園した。この施設内に建設された国立アイヌ民族博物館も同日開館し、今日に至る。

この章では、昭和59年から令和5(2023)年までのポロトコタンを中心とした衣服文化について述べる。

3.3.1. ユニフォームのはじまり

(昭和59〔1984〕年～平成7〔1995〕年頃まで)

白老民俗資料館からアイヌ民族博物館へと名称変更した昭和59年(1984)年頃のポロトコタンでは、舞踊を披露する屋外ステージが新たに整備され、以前にも増して、多くの職員が舞踊に関わるようになった。平成3(1991)年、約87万人の来園者をむかえ年間最高入場者数を達成した。この頃から、白老という地域性を考慮しつつ、かつ一体感を演出することを目的とし、衣装をユニフォーム化したルウンペがつくられるようになった。外見だけではなく、舞踊時における用途や機能性にも配慮するようになり、形態や素材を

変化させていった。形態は、写真23、写真24と同様の和裁を取り入れた木綿製のルウンペが主流であった。そのようなルウンペを着用する際は、別布で特にアイウシ(とげ模様)を刺しゅうした帯をしていた。そしてこの頃には、化学繊維が安価で入手しやすくなり、さらに洗濯などの手入れがしやすいことから、平成に入ったころから木綿から化学繊維へ段階的に移行した。化学繊維を素材としたユニフォームづくりは、平成7(1995)年頃まで行われた。



写真26 サーム博物館との交流のようす(昭和59〔1984〕年)。
国立アイヌ民族博物館蔵

またアイヌ文化について解説を行っていた男性は、着丈が長いルウンペを着用し、その上に陣羽織を羽織っていた(写真26)。この頃は、現在一般的に着用されている、刺しゅうが入った手甲や脚絆は身に着けていない。ルウンペの様子は、近藤ノリ子が製作したルウンペと同様の模様である。ユニフォーム化したルウンペ以外にも、有珠や伊達といった噴火湾地域の伝統的な衣服の製作方法も取り入れ、白老地域における伝統的な儀礼などで活用するようになった。



写真27 国の重要無形民俗文化財指定記念 アイヌ古式舞踊発表会(昭和59〔1984〕年)のようす。国立アイヌ民族博物館蔵



写真 28 チセ内で踊りをしているようす。
国立アイヌ民族博物館蔵

3.3.2. 大量生産されるユニフォーム

(平成 8〔1996〕年～平成 14〔2002〕年頃まで)

ユニフォームの活用が定着してきたこの時期、舞台演出を意識した装いや機能性を重視した素材選択といった新たな動きがある一方、伝統的なルウンペへの回帰もはじまった。男性の衣服は、エムシリムセ（刀の舞）やクリムセ（弓の舞）などを演じることから、ルウンペの丈が短くなり、刺しゅう入りの手甲と脚絆が装身具として着用されるようになった。また、男女ともにルウンペの素材は、軽量かつ洗濯に適した化学繊維が多く採用され、製作されていた。

女性の衣装は、「伝統的な様式に戻す」という財団の方針のもとに、帯の着用がなくなった。その代わりに、腰に紐を付け着脱が以前のものよりも簡単になった。儀礼や出張公演などの特別な機会には、木綿でできたルウンペを着用した。これらは、旧アイヌ民族博物館の収蔵品や、他の博物館等で収蔵している白老地域のルウンペなどを参考とし、製作されたものである。そのため、原資料と色味を似せたものや、その反面、個性を出すために色違いにする工夫も行われた。また衣装の一部には、複数のルウンペの模様の要素を取り入れたものも確認できる。

出張公演等のアウトリーチ活動で活用されたルウンペは、白老地方の地域性を表すものとして説明され、舞踊の演目とともに「白老地域のアイヌ文化」として紹介されるようになった。

3.3.3. 伝統へ回帰していくユニフォーム

(平成 15〔2003〕年から平成 30〔2018〕年まで)

平成 9 (1997) 年、アイヌ文化の継承者の育成、伝統等に関する広報活動の充実、アイヌの歴史と文化等の調査研究等に努めることを目的とした「アイヌ文化振興法（略称）」¹⁴⁾ が施行された。アイヌ文化の復興と推進が図られる中、旧アイヌ民族博物館では、文化



写真 29 出張公演時のルウンペ
世界原住民族文化祭（平成 9〔1997〕年）台湾
国立アイヌ民族博物館蔵



写真 30 出張公演のようす
創作浄瑠璃「ひなのひとふし、ひなの遊びII
—菅江真澄の旅と日記より」（平成 10〔1998〕年）
国立劇場（東京都） 国立アイヌ民族博物館蔵



写真 31 先住民族フェスティバル in 白老
(平成 11〔1999〕年) 白老 国立アイヌ民族博物館蔵

庁の事業の一環で、平成14(2002)年以降、白老町内在住者を対象とし、伝統的な衣服を複製する文化復興事業が行われ、白老地域などの木綿衣に関する製作技術やその模様が再検証された。これらの複製事業等で得た知見を基とし、ポロトコタンでは木綿製のルウンペを積極的に着用するよう、山丸郁夫(1955-2013)をはじめとする白老地域のアイヌ出自の職員たちより推奨された。ポロトコタンの古式舞踊公演で一般的だった化学繊維製のルウンペは、この頃には劣化・摩耗などにより本体や刺しゅうの補修が繰り返されたことから、活用される機会は減り、後進育成の教材として保管された。また、白老地域で収集されたルウンペにとどまらず、周辺の伊達や有珠などの噴火湾地域のルウンペの製作技術を模倣したルウンペも着用され、バリエーションが増えていった。平成20(2008)年頃からは、手工芸担当の職員たちを中心に、「新しいアイヌ模様をつくる」ことが検討されたが、当時議論が進んでいた国立博物館の建設準備を職員間で意識したためか、「白老地域のルウンペ」を忠実に製作する方針に転換した。これ以降、アイヌ文化の普及啓発やポロトコタンのPR活動のための出張公演が増えたため、ステージ映えする衣装を意識した製作も行われた。

山丸郁夫が着用したルウンペは、伝統を取り入れながらも観光事業を視野に入れ、舞台映えを意識した衣装となっている。山丸はポロトコタンでアイヌ文化の解説や舞踊の紹介、儀礼を実施したことにより「ポロトコタンの顔」として知られた。特にアイヌ民族や文化の普及啓発活動における舞踊紹介に取り組んでおり、伝承された舞踊やアイヌ語での語りを組み込んだ新しい舞踊プログラムを実施するほか、広い舞台で舞踊を紹介するための工夫をしていた。そのなかの一つがルウンペなどの木綿衣の工夫である。職員に白老地域に伝わる木綿衣の製作を推進し、さらに赤や青などの明度が高い布や刺しゅう糸を効果的に使ったルウンペを職員にオーダーし、それらを着用していた。写真33の衣服は、下河ヤエが製作したルウンペである。



写真32 山丸郁夫。2010年頃撮影
国立アイヌ民族博物館蔵



写真33 山丸郁夫が着用したルウンペ。
個人蔵

平成26(2014)年、「『民族共生の象徴となる空間』の整備及び管理運営に関する基本方針」が閣議決定された。民族共生象徴空間が北海道白老郡白老町へ整備されることが決定した。これ以降、白老地域の衣服製作者たちは、旧アイヌ民族博物館や他館の収蔵品を熟覧し、伝統的な木綿衣を製作していく。特にルウンペは、白老地域で製作または着用された情報がある資料を参考とし製作された。

「民族共生の象徴となる空間」整備が白老町に決定したのち、町内では白老町活性化推進会議が設置された(白老町2016)。国内で数少ない国立施設が整備されることを受け、町内の民間と行政、その他関係団体が連携・協力(コラボレーション)する体制により、「オール白老」として全町あげての取組を推進するものとした。これは、対外的なアピール力とともに、民間の迅速力、活動力、資金力等と行政の情報力、信頼力、調整力等のそれぞれの優位性を掛け合わせる組織力で全町が一体となった活動を展開して、活性化を目

指すものとした。これを契機とし、官民一体となった普及啓発活動の機会が増えた。アイヌ民族の歴史や文化について講演したり、古式舞踊を紹介したりする職員は、白老町で伝承されたルウンペを複製した木綿衣を着用した。白老町役場や民間企業に所属する職員は、ルウンペの模様を取り入れた半纏を着用し、広報活動にあたった。このためルウンペやアイヌ模様入りの半纏などの衣服のニーズが急増し、白老民族芸能保存会や白老町内の刺しゅうサークルにおいて、衣服製作に関する人材育成が急務となった。このことにより、人材育成を視野にいれた技術伝承の機会が創出され、白老町内の伝統衣服の製作者は徐々に増えていった。



写真34 アイヌミュージアムフェア in 広島のような（平成24〔2012〕年）。 国立アイヌ民族博物館蔵



写真35 座り歌を披露する女性職員。
平成25（2013）年筆者撮影。 国立アイヌ民族博物館蔵

3.3.4 アイヌ文化の地域性を示すルウンペ （平成30〔2018〕年のウポボイ開園準備から現在まで）

平成30（2018）年、長い間親しまれてきたポロトコタン（一般財団法人アイヌ民族博物館）が公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構と組織合併し、名称を公益財団法人アイヌ民族文化財団と改めた。そして、令和2（2020）年7月に、アイヌの歴史・文化を学び伝えるナショナルセンターとしてのウポボイ

（民族共生象徴空間の愛称）が開園した。

ウポボイでは、白老も含む各地域の衣服の製作者たちの協力を得て、地域性を表現した伝統的な衣服を製作した。これらの木綿衣は、博物館の展示、体験交流ホールやコタンゾーンなど各施設で着用され、各地域の舞踊やアイヌ文化の紹介にて活用されるようになった。これまでのポロトコタンにおける一体感を演出したユニフォームから、アイヌ文化の地域性・独自性を表現した脱ユニフォーム化した木綿衣として変わっていった。



写真36 ウポボイにおける舞踊のようす
（令和元〔2019〕年撮影） 公益財団法人アイヌ民族文化財団蔵



写真37 ウポボイにおける水鳥の舞のようす
（令和元〔2019〕年撮影） 公益財団法人アイヌ民族文化財団蔵

3.3.5. 白老地域の現在の製作者たち

白老町内で活動している製作者はたくさんいるが、本稿では町内の刺しゅうサークルを主宰している等の経歴がある6名を取り上げる。それぞれの代表的な資料をもとに、展示資料を製作したときの考えを紹介する。

写真38のアットウシ（樹皮衣）は、山崎シマ子（1940-）により令和元（2019）年に製作されたものである。山崎は昭和61（1986）年からポロトコタンに勤め、その翌年からルウンペなどの木綿衣の製作を始めた。退職後は、みんなで集まってものづくりをし

たいという思いから「テケカラベ（アイヌ語でものつくりの意）」というサークルを主宰し、ルウンベやアットゥシ（樹皮衣）などを製作している。アイヌのものづくりは、自然素材を使うことに意義があると考えて、なるべく伝統的な民具を製作するように心掛けているという。このアットゥシの模様は、山崎自身がオリジナルで考えた模様である。白老に伝わるものを基本として、自分独自の模様も作っていきたいと考えている。



写真 38 山崎シマ子製作のアットゥシ 個人蔵



写真 39 山崎シマ子 筆者蔵

写真 40 のルウンベは、下河ヤエ（1938-）により令和元（2019）年に製作されたものである。下河はもともと和裁を習得しており、結婚後、縁あってポロトコタンで踊りをしつつ、職員たちの着物や陣羽織、手甲や脚絆を製作したという。退職後、個人的に木綿衣を製作し、白老町で伝承されているものだけではなく、さまざまな地域に伝わっている木綿衣や装身具を製作している。下河ヤエ製作のルウンベは、その個人の体形に合わせて製作している。筆者も一度着用したことがあり、いろいろなルウンベを着用してきた中

でも、特に着やすかった印象を受けた。特に動きの激しい踊りをするとき、着崩れたり、腰紐がとれることがなく、体の負担が少ないと感じた。改めて令和4（2022）年5月に聞き取り調査の際には、「日舞をさせてもらっていて、その経験も踏まえて、着用する人がどうやっても着やすいように色々やっている。自分は特に白老地域のルウンベを精力的に製作していきたい」と語った。



写真 40 下河ヤエ製作のルウンベ 個人蔵



写真 41 下河ヤエ 白老町教育委員会提供

写真 42 のルウンベは、河岸麗子（1949-）により平成10（1998）年に製作されたものである。河岸は旧アイヌ民族博物館の職員として、しばらくしてから工芸班へ異動し、そこからものづくりを中心に行う仕事をしてきた。このルウンベは、平成10（1998）年に当時のアイヌ文化振興・研究推進機構（現アイヌ民族文化財団）のアイヌ文化再現マニュアル「木綿衣」で製作したものである。少ない布をつなぎあわせて一着をつくる大変さや、材料が貴重な時代のものづくりに思いを馳せながら楽しく製作できた思い出の一着であるという。伝統的なものづくりを実際自分で考えて行い、原資料をいかに忠実に再現するか、という取り

組みも実施している。



写真 42 河岸麗子製作のルウンペ。
公益財団法人アイヌ民族文化財団蔵



写真 43 河岸麗子 国立アイヌ民族博物館蔵

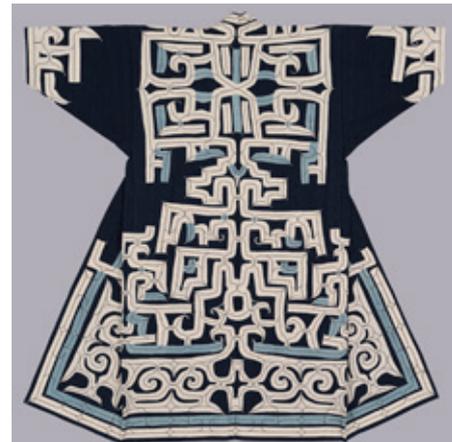


写真 44 林洋子製作のルウンペ。
国立アイヌ民族博物館蔵。原資料：北海道博物館蔵



写真 45 林洋子 国立アイヌ民族博物館蔵

写真 44 のルウンペは、林洋子（1942-）により平成 22（2010）年に製作されたものである。林は 24 歳ころから母親の影響で和裁を行ってきた。母はポロトコタンの解説員であった父・住吉平吉¹⁵⁾（1900-1982）が着用する着物や陣羽織を作っていた。旧アイヌ民族博物館が平成 22（2010）年から平成 25（2013）年まで実施した複製事業に参加し、3 年間で 11 着の木綿衣を製作した。この資料はそのうちの成果品のひとつである。「先祖の着物を自分の目で見て、勉強しながら作れたのは良かったと感じており、たくさんの着物を見て、これからも作れたら嬉しい」と語っている。

写真 46 のカバラミツは、菅野節子（1944-）により製作されたものである。菅野は松前城資料館（松前町）で展示していた木綿衣が辨開颯次郎（べんかいたこじろう）（1847-1924）が着ていたカバラミツ（木綿衣）だと知り、自分なりに作ってみたくなったという。「背中の模様が印象的だったので、とても楽しく作れた」と語っている。平成 22（2010）年からポロトコタンでルウンペやカバラミツ（木綿衣）などをつくったことにより、自分でももっといろんな地域の木綿衣を作りたいと考えている。平成 25（2013）年から「エミナの会」を主宰し、各自好きなものをマイペースに楽しく作っている。



写真 46 菅野節子製作のカパラミナ。
個人蔵。原資料：松前城資料館蔵



写真 48 岡田育子製作のルウンペ。
公益財団法人アイヌ民族文化財団蔵



写真 47 菅野節子 国立アイヌ民族博物館蔵



写真 49 岡田育子 個人提供

写真 48 のルウンペは、岡田育子（1949-）により平成 29（2017）年に製作されたものである。岡田は公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（現公益財団法人アイヌ民族文化財団）の DVD『アイヌ文化伝承活動アーカイブス 技 vol.2』にて出演し、その際、自分の家系に伝わるルウンペとして製作した。岡田は、前掲 3.1.5. で紹介した野本イツ子の直系子孫である。このルウンペは、自分の家にあった写真をもとに作ったものである。ほかにも岡田家には着物があったようである。

岡田がルウンペなどの木綿衣を製作しはじめたのは、結婚後である。夫から「着物をつくってみないか」と言われたのがきっかけである。初めて作った着物については、「夫が大事に持ってくれている」と語っていた。また、伝統的な着物を製作したとき、父・野本亀雄（1917-2005）がとても喜んでくれたという。現在「フツチコラチ（アイヌ語でおばあさんのようにの意）」を主宰し、地域のみなと楽しくものづくりをしており、とくに白老地方で伝承されてきた着物を作っていきたいとの思いがある。

以上、今回紹介した 6 名が、それぞれの経験をもとに、ルウンペ等の衣服製作を行っていることが伝わるであろう。この 6 名は、アイヌ刺しゅうサークルを主催したり、複製事業で講師を務めたりするなど、白老町内で指導的立場にあるので、これから前掲で述べたような伝承されたルウンペにとどまらず、さらに多様な価値観のもと、創意工夫がなされ、白老地域のルウンペとして製作されたものが活用されていくことになるであろう。

4. 白老地域のルウンペの特徴とその変遷

4.1. 白老地域のルウンペの特徴

白老コタンでは、前掲 3.1.1. や 3.1.2. のように、細長い布を直線的に縫い付ける模様を多用するルウンペのほかに、面状の布を切り抜き縫い付ける模様を多用するルウンペも伝承されてきた。その面で構成される模様は、腰を境として上下に分かれ独立し、同じような模様の構成となっており、多くは白い布が使われている。

昭和中期までの白老コタンのルウンペは、以下の3つの傾向に大きく分けることができる。

- ①直線的な模様が多用されているもの(写真3、5、20、22)
- ②背中と裾に赤い布で切り抜いた模様が施されているもの(写真6、7、8、9、10)
- ③全体的に切伏が施されているもの(写真12、13、15、17)

さらに、昭和38(1963)年以前に製作、着用されたルウンペは、いわゆる衤と呼ばれる和服の前身頃が重なり合う部分の半幅の布がないものが多い。そしてそれ以前に衤のないルウンペを着用する際は、和服の上から重ね着をして、腰に帯をすることが白老地域では一般的であったとみられる。これはポロトコタン移転前の昭和38(1963)年頃に当時の白老小学校の校庭で輪踊りを行っている人たちのルウンペをみると、陣羽織を着用している男性の腰帯は確認できないものの、男性も女性も腰帯を着用していることからわかる(写真50)。



写真50 「小学校の校庭で、観光客に輪踊りを披露しているようす」を一部拡大
国立アイヌ民族博物館蔵(収蔵番号90051)

また、白老地域には明治以降、北海道内各地から拠点を移し、観光業や漁業等に従事した人たちがたくさんいる。宮本イカシマトク(日高地域)、貝澤藤蔵(平取から旭川近文コタン)、山川勘吉(瀬棚郡瀬棚)などである。さらにそれらの人たちに頼り、道内からたくさんの方が白老コタンにやってきた。

白老コタンの住民たちは、もともと白老に住んでいる人たちと、日高地域から白老に移住してきた複数のグループがあり、そうしたいくつかのグループがまざって白老の人達となっていたことがわかっている

(北海道ウタリ協会白老支部1998:5-6)。また、明治期には道南地区から移住してきた家系も複数いたことが聞き取り調査で判明した。日高地域とのつながりが強いことはこれまで知られていたが、白老より西から道南地区にかけてのつながりも見えてきた。また、上記で分けた3つのグループは、おおよそ家系で分ける事ができる。

①のルウンペは、白老地域で、明治期以前より白老で暮らしている、宮本サキ、木村フジエなどの家系に属している人が製作したものに見られる。このグループは、母方の出自が白老地域であることが特徴である。

②のルウンペは、野本姓のある系統や宮本サキが残したものである。この家系の人々は、白老コタンのなかでも、いわゆる長老として集落をまとめるなど、各所でリーダーとして一目置かれる存在となる人物を多数輩出している。このことから「背中の赤い布をくり抜きモレウを施した」模様があるルウンペは、白老地域の特徴として、アイヌ出自の製作者たちのなかで、白老で大切にすべき模様だとの認識に至ったと考えられる。

そして③の切伏を全体に施しているルウンペは、白老地域では上野家周辺にのみ見られるものである。これはムイテクンが日高地方の技術を色濃く受け継いできたためと考えられる。

このことにより、移住してきた人たちがそれぞれの出身地で身につけたアイヌ語や民具製作の技術などが白老地域に伝承された。それらは各家系毎に伝承してきたが、白老コタンにおける観光チセのアイヌ文化紹介の機会等で着用し、さらに製作してきたことで、「白老のルウンペ」という地域の特性となり、広く知られるようになったのではないだろうか。

4.2. 白老地域のルウンペの変遷、その価値観

白老コタン時代の家系で受け継いできた「白老の伝統的なルウンペ」とは、伝統的な衣服文化に、明治期前後に生じた人の移動に伴う他地域の衣服文化が加わったことでつくられたルウンペであると推測される。

白老地域のルウンペは、おおよそ家系で受け継がれ、1967年に白老民俗資料館が開館し、ポロトコタンとして運営が軌道に乗るまでの期間、各家庭などで製作されたものを持ち寄る形態があったとみられる。ポロトコタンの解説員だった松永金太郎や住吉平吉ら

は、妻や母などの親族が製作していたものを着用し、業務にあっていた。

その後、ポロトコタンの経営が軌道にのった後、昭和期に和裁を習得した人たちによる、衿をつけたルウンペ模様の衣服が、白老民俗資料館の展示備品になった。また展示備品製作者である近藤ノリ子が、踊り手の衣服として、この形態のルウンペの製作を手掛けることにより、同様のルウンペが定型化され、大量生産に適したユニフォームが実現した。このルウンペを踊り手が着用することで、地域性を表す新しい形のルウンペとなり、多くの来館者に視覚的に「白老ポロトコタン」という印象を与え、白老地域の特色として定着した。

その後、旧アイヌ民族博物館で平成22(2010)年以降に行われた衣服の複製事業で学んだことを契機とし、伝統的な衣服を製作することを意識する人が増えた。令和4(2022)年末に林洋子、菅野節子両名から行った聞き取り調査で、「平成22年から実施された複製事業では、白老地域で製作、着用された衣服を原資料とした。縫い方、刺しゅうの仕方もなるべく忠実にするよう熟覧をした上で製作に反映するよう、学芸員等から指導を受けた」という証言を得た。このときに指導者、製作者、学芸員が参考とした原資料が、「白老地域のルウンペ」という共通認識をつくりあげたといえる。同時期に同じ原資料を参照した上でルウンペを製作し、他の複製事業の参加者たちと認識を共有したことにより、「地域で受け継ぐルウンペ」としての意識へ変化していったのではないかと想定される。これは、白老民俗資料館や旧アイヌ民族博物館の事業に、白老地域のアイヌ出自の人が、職員や指導者、さらに複製事業の参加者として関わってきた人物が多いことも挙げられるであろう。ポロトコタンの職員として衣服製作を行った山崎や下河、河岸が、筆者が行った聞き取り調査のなかで、共通して語っていた内容がある。それは「自分がつくったモノを博物館に収めたことが嬉しかった¹⁶⁾。それは良いモノをつくったと評価されたと思えたためだ。特に嬉しかったことは、自分が頑張ってつくったモノが展示されたことだ」というものである。このことから、博物館の資料を熟覧した上で製作を行い、成果を何らかの形で残すという一連の流れを経て、博物館への関心が高まったものとみられる。山崎、下河、河岸は博物館の事業に使用されるルウンペを複数枚つくったことで、さらに製作への意欲が高まり、そこで得た知識や経験を、

ポロトコタン退職後にそれぞれ指導者として後進を育成した結果と考えられる。林、菅野は、複製事業で製作した衣服が、成果品展として展示されたことを契機として、博物館事業に大きく関心を寄せる結果となった。そのため、現在はウポポイの職員が着用するユニフォームとして衣服の製作を行っているという。

また岡田育子のように、はっきりと個人所有でルウンペを持っている/いた場合、それは「家系で受け継ぐルウンペ」と認識されていたが、主宰サークルなどでも製作されることにより家庭を超えて地域においても継承されていくこととなる。

こういったことから、白老地域におけるルウンペの価値観が「家系で受け継ぐもの」から「地域で受け継ぐもの」と広がりをもせた要因は、博物館の果たす役割が、ルウンペの製作者たちへ少なからず影響していたことが考えられる。白老民俗資料館、旧アイヌ民族博物館では展示室だけではなく、復元した伝統的チセとその内部で民族資料の展示や古式舞踊の紹介が行われた。さらに館で収集した民具類を職員たちが複製し、その成果品は調査研究事業や教育普及活動において利用された。ルウンペはそれらの事業で、博物館収蔵品、展示備品、伝承公開事業におけるユニフォームなど、目的に応じた衣服を製作し公開されたことにより、白老地域の衣服製作者たちへ波及した。その一連の流れが白老地域のルウンペの変遷であると筆者は考える。

4.3. まとめ

白老地域のルウンペの特徴は、衣服本体に使用する素材に木綿や化学繊維などの選択があることを前提とし、施されるアイヌ模様は、腰のあたりで模様が分離しているものとなる。そして全体に施されるアイヌ模様は、直線的な模様が多用されているもの(写真3、5、20、22)や背中と裾に赤い布で切り抜いた模様が施されているもの(写真6、7、8、9、10)、そして日高地方の影響を受けた上で、全体的に切伏が施されているもの(写真12、13、15、17)の要素を保持しているものであるといえる。これらは、児玉作左衛門や児玉マリ、岡田路明の先行研究で述べられている内容と一致するであろう。しかしながら、児玉作左衛門や児玉マリの調査は、製作者たちのなかで「もともと白老にいた先祖たちが古来より受け継いできたものである」という認識に至り、アイヌ民族の社会における人の移動やモノの移動を受け、地域間の影響を取り入

れ、物質文化として変容した事実がなおざりになったのではないだろうか。

令和元（2019）年以降、白老では伝承された衣服や装身具などを参考とし、新しい模様を製作する動きがある。これからは、伝統をベースとした新しい模様が製作者たちによって創出されていくことになるであろう。そこには、博物館における資料保管や展示等の公開業務が、アイヌ民族の伝承活動に留まらず、地域文化として波及した白老地域の事例が参考となるのではないだろうか。今後の伝承活動では、製作目的に応じたモノづくりが行われる際、製作者たちは資料の背景情報や製作者の情報を参考とし製作を進めていくこととなるであろう。筆者は国立アイヌ民族博物館を含めたウポボイの各種事業では、これまでより多くの情報の蓄積と公開が期待されるだろうと想定している。

5. おわりに

本稿は、令和4（2022）年3月15日（火）から5月15日（日）まで国立アイヌ民族博物館特別展示室にて、第2回テーマ展示「地域からみたアイヌ文化展 白老の衣服文化」として紹介した内容を基礎とした。当展示会では、白老で製作または着用されたルウンペに焦点をあて、70点展示した。白老の衣服を一堂に会して展示し、白老の衣服文化に影響を与えたと考えられる時代の動向を示すことで、衣服の地域性が形成されていく過程を紹介した（写真51）。会期中、

約44,000人が来場した。また、あわせて博物館1階のエントラスロビーにて、第4回エントランスロビー展示「シラウォイ ウンクル テケカラ ペー 白老で活動するアイヌ工芸サークル」を開催した（写真52）。

来場者からは、特に近藤ノリ子が製作したルウンペをもととし、旧アイヌ民族博物館の開館当初に、化学繊維で大量生産が図られ、ユニフォーム化し、それが白老のルウンペと認識されていた点について、大変興味深いとの声があった。一方、アイヌ衣服に関する解説文を書くコーナーでは、「国立の博物館で、ミシン製作の衣服を展示するのはびっくりした」という声もあった。これは実際、手縫いで木綿衣等を製作する、伝承活動を行っている人からの意見であった。筆者は事前にこのような意見が来ることを予想していた。ポロトコタンの衣服史を語る上で、これまでの製作者や着用者が、いつどの時代にどのような目的のために衣服を製作し、工夫をしていたかを考慮すべきと考えていた。そのなかで、化学繊維を使った和服形式にアイヌ模様を施したルウンペが、観光業をメインとした時期に着用されたことは事実である。そしてこの形態のルウンペは、木綿衣を素材としたものに現在も同様に作られている。この内容については賛否両論あると考えるが、いつどの時代に製作者たちが何を考えてモノをつくりだしてきたかを検討するためには、蓄積していくべき情報ではないかと展示担当者で協議した上で、展示に反映した。



写真51 「白老の衣服文化」展における、ユニフォームの変遷を紹介するコーナーのようす。



写真52 エントランスロビー展示のようす。刺しゅうサークルの一押しの展示品を紹介した。

展覧会を終えて以降、展覧会を観覧した関係者等から筆者へ情報が提供されたことに加えて、聞き取り調査を追加で行ったことで、本稿を投稿できるまでのボリュームとなった。

明治期以降の白老地域の動向とともに、白老地域のルウンペは、製作者や着用者の創意工夫が盛り込まれつつ、現在までに伝承されてきた。令和4(2022)年まで私が行った聞き取り調査では、「地域で受け継ぐ衣服」「自分の民族としての帰属意識を高める衣服」「アイデンティティそのもの」「自分の家系を再認識するため」等、多様な価値観のもと、ルウンペが製作されて活用されている場面が見受けられた。このことについては、さらに追加調査を行い、まとまりが出来たタイミングで発表したい。現在まで製作者も着用者も、並々ならぬ思いをもって「ルウンペ」というものを受け継いできたという事実を、上記展覧会の準備段階、さらに本稿をまとめるにあたり再認識することができた。白老地域ではこの先も、きっと様々な創意工夫を凝らしつつ、原資料を基としたルウンペが継承され、活用されていくことになるかと私は考える。

本稿をまとめるにあたり、私は「白老地域に伝わるルウンペ」に対する諸先輩たちの、それぞれの知識や技術、そして想いに触れることができた。これは民族、年代、性別関係なく「地域で守るべきもの」として、先輩たちがこの白老地域で伝承活動を行い、今日に至ったおかげである。

本稿は、白老地域のルウンペに焦点をあてまとめた。さらにルウンペ以外のアットゥシ(樹皮衣)やチカラカラベなどの木綿衣、装身具については、今後追加調査を行い、検討したい。

謝辞

本稿を作成するにあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。

ポロトコタン職員のみなさま、白老町内刺しゅうサークルのみなさま、また親類のみなさまには、聞き取り調査にて多くのことを学ばせていただきました。厚く御礼申し上げます。

元・苫小牧駒澤大学教授の岡田路明氏より、昭和40年代に白老地域を調査した写真や情報を提供いただきました。心より感謝申し上げます。

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授の蓑島栄紀氏には、本研究についてご指導いただきました。厚く御礼申し上げます。

北海道博物館の大坂拓氏には、ご助言と激励をいただきました。英訳に関しては、マーク・ウィンチェスター氏よりご協力いただきました。

最後に、本稿を作成するにあたり、国立アイヌ民族博物館の鈴木建治氏、谷地田未緒氏、大江克己氏、是澤櫻子氏より、多大なご助言、ご協力をいただきました。

ここに記して感謝申し上げます。ソノノ イヤイライケレ。

注

- 1) 白老町内には、4か所コタンがあり、東側から社台(しゃだい)コタン、白老コタン、敷生(しきう)コタン、アヨロコタンがあった。白老コタンは、白老町の高砂町から大町にかけて存在したコタンである。
- 2) 昭和40(1965)年、白老市街地にあった白老コタンをポロト湖畔に移転し、白老観光コンサルタント株式会社が運営主体となり、ポロトコタンとして営業を開始する。その後、敷地内に白老民俗資料館が開館、

- 昭和 59 (1984) 年にアイヌ民族博物館が開館した。財団法人白老民族文化伝承保存財団が運営を行っていたが、平成 2 (1990) 年に財団法人アイヌ民族博物館と改称した。平成 25 (2013) 年には一般財団法人へ移行した。また、隣接していた商業施設ミンタラを含めて、「ポロトコタン」と呼称された(財団法人アイヌ民族博物館 1996)。平成 30 (2018) 年 3 月末日を持って、国立施設の準備のため閉館。2020 年 7 月に開館した国立アイヌ民族博物館とは別の組織であることから、本稿では「旧アイヌ民族博物館」「ポロトコタン」と表記する。
- 3) ポロトコタンに昭和 40 (1965) 年以降に勤務し、工芸関係の職務経験のある人を対象として行った聞き取り調査。主に聞き取り対象者の自宅や作業場にて実施した。
 - 4) 満岡伸一 (1882-1950)。明治 45 (1912) 年白老郵便局長となる。大正 13 (1924) 年に『アイヌの足跡』初版を出版した。白老に暮らすアイヌ民族の歴史、生活、信仰などをまとめた。昭和 16 (1941) 年まで 6 版を重ね、入門書として親しまれた(北海道新聞社 1993)。
 - 5) 児玉作左衛門 (1895-1970)。人類学者。昭和 4 (1929) 年北海道帝国大学教授。アイヌ民族の民俗学的研究、北海道考古学を研究対象とした(北海道新聞社 1993)。私財を投じて収集したアイヌに関する膨大な資料群は「児玉コレクション」と呼ばれる(大矢 2017)。
 - 6) 児玉マリ (1929-2017)。アイヌ民族博物館特別研究員。児玉作左衛門の長女。児玉作左衛門が収集した児玉コレクションを引き継いだ(財団法人アイヌ民族博物館 1989)。
 - 7) モ=静かに、レウ=曲がる。モレウノカで渦巻き型模様と訳される(萱野 2002 : 436-437)。
 - 8) これまで白老町史等の文献において、宮本イカシマトク (1876-1958) の表記は、「エカシマトク」「エカシトク」「イカシマトク」などがある。直系子孫である大須賀るえ子の研究にて「イカシマトク」と統一されていることから、本稿ではそれを踏襲する(白老 楽しくやさしいアイヌ語教室 2013)。
 - 9) 木下清蔵 (1959-1988)。写真家。大正から昭和 40 年頃までの白老のアイヌ民族を撮影、記録した。木下の没後、それらの写真類は白老民族文化伝承保存財団へ寄贈され、その一部は 1988 年に「シラオイコタン」木下清蔵遺作写真集」として刊行された。木下の写真は、現在国立アイヌ民族博物館が所蔵している。(財団法人白老民族文化伝承保存財団 1988)
 - 10) 昭和 40 年代に岡田が実施した調査では、野本ハナエ (1921-2018) が所有していたルウンペである。ハナエの母が製作し、所有していたものである。赤い布を使ったモレウが施されている。
 - 11) 同上。
 - 12) 社台コタンのルウンペに関する文字記録はない。昭和 40 年代に岡田が実施した調査において、聞き取りを行ったある人物から、社台コタンのルウンペは、赤い布が使われておらず、直線的な模様が多いことが特徴であると教えられた。
 - 13) 白老民俗資料館に作成された資料カードでは、「チカラカラベ」と記載されている。
 - 14) 正式名称は、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」。アイヌ文化を、アイヌ語並びにアイヌにおいて継承されてきた音楽、舞踊、工芸その他の文化的所産及びこれらから発展した文化的所産と定義し、アイヌ文化の振興等を図るための施策を推進、施策の実施に努めることを、国や地方公共団体の責務とした(出典：e-Gov ポータル)。
 - 15) 住吉平吉(1900-1982)。白老民俗資料館解説員。瀬棚出身。昭和 26 (1951) 年頃、白老に来て、木下清蔵が経営していた木下写真館の大工を行った後、白老民俗資料館の解説員となった(八幡 2021 : 45)。
 - 16) 山崎シマ子によると、「工芸担当者は、毎年自分が製作したルウンペやアットゥシ(樹皮衣)、模様入りのごびを年度ごとの成果品として報告し、博物館の学芸課に渡していた。そのことを、私たちは博物館に収めるという表現をする。学芸担当の職員は収めた成果品たちを収蔵庫や物品庫に保管して、大きい儀式のときに使うために出して、終わったら元どおりしまっておいた」とのことである。山崎が勤務しはじめたときは、工芸担当者は学芸課所属であったが、その後行われた組織改編で、伝承課にて工芸を担うことになったという。

参考文献

- アイヌ文化保存対策協議会(編)
1970『アイヌ民族誌』東京：第一法規出版株式会社。
- 秋葉實(編)
1991「荒井保恵 1809『東行漫筆』」『北方史料集成』第 1 巻:1-237、札幌市：北海道企画センター。
- e-Gov ポータル
平成九年法律第五十二号 アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律 (<https://www.e-gov.go.jp>) (2023 年 10 月 15 日閲覧)
- 『エカシとフチ』編集委員会
1983『創立二十五周年記念出版 エカシとフチ 資料編 文献上のエカシとフチ』札幌：札幌テレビ放送株式会社。
- 大矢京右
2017「児玉コレクションの収集経過とその周辺」『市立函館博物館研究紀要 第 27 巻』pp1-40、函館：市立函館博物館。
- 岡田路明
1995「アイヌの着物の地方的特色をさぐって-胆振西部地域製作の着物の所在調査-」財団法人アイヌ無形文化伝承保存会編『アイヌ文化 第 19 号』pp3-13、札幌：財団法人アイヌ無形文化伝承保存会。
- 萱野茂
1978『アイヌの民具』東京：すずさわ書店。
2002『萱野茂のアイヌ語辞典 増補版』東京：三省堂。
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
2017『アイヌ文化伝承活動アーカイブス 技 vol2』札幌：公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
- 児島恭子監修
2018『増補・改訂 アイヌ文化の基礎知識』白老：財団法人アイヌ民族博物館(初出は 1993 年、千葉：草風館)。
- 児玉作左衛門
1941「デ・アンジェリスの蝦夷国報告書に就て」『北方文化研究報告 第四輯』pp201-298、札幌：北海道帝国大学。
- 児玉作左衛門・伊藤昌一
1968「アイヌ服飾の調査」北海道教育委員会編『アイヌ民俗資料調査報告』p28-89、札幌：北海道教育委員会。
- 児玉マリ
1986「木綿衣-ルウンペという晴着について」『アイヌ民族博物館研究報告 創刊号』pp16-34、白老：(財)白老民族文化伝承保存財団。
- 佐々木利和
2001『アイヌ文化誌ノート』東京：吉川弘文館。
- 財団法人アイヌ民族博物館
1989『アイヌ民族博物館 児玉資料目録 I』白老：(財)白老民族文化伝承保存財団 アイヌ民族博物館。
1991『アイヌ民族博物館 児玉資料目録 II』白老：財団法人アイヌ民族博物館。
1991『アイヌの衣服文化』白老：財団法人アイヌ民族博物館。
1993『亮昌寺資料目録』白老：財団法人アイヌ民族博物館。
1994『シンボジウム アイヌの衣服文化』白老：財団法人アイヌ民族博物館。
1996『財団法人設立 20 周年記念誌 二十年の歩み』白老：財団法人アイヌ民族博物館。
- 財団法人白老民族文化伝承保存財団
1982『白老ポロトコタン-白老民俗資料館報- No.2』白老：財団法人白老民族文化伝承保存財団。
1988『シラオイコタン』木下清蔵遺作写真集』白老：白老民族文化伝承保存財団。
- 白老 楽しく・やさしいアイヌ語教室
2013『白老アイヌの研究 I -宮本イカシマトク・妻サキを中心に-』白老：白老 楽しく・やさしいアイヌ語教室。
- 白老町
1975『白老町史』白老町(北海道)：白老町役場。
2016『民族共生象徴空間』整備による白老町活性化推進プラン 平成 28 年 3 月版]

(https://www.town.shirai.hokkaido.jp/fs/3/1/6/3/0/_/plan.pdf) (2024年2月10日閲覧)

白老町町史編さん委員会(編)

1992a『新白老町史 上巻』白老町(北海道):白老町役場。

1992b『新白老町史 下巻』白老町(北海道):白老町役場。

田辺忍

1984『白老今昔物語』白老:田辺眞正堂。

津田命子

2011『アイヌ刺しゅう入門(ルウンベ編)』札幌:津田命子。

2019『アイヌ衣文化の研究』札幌:津田命子。

北海道ウタリ協会 白老支部

1998『白老支部の50年——白老支部設立50周年記念誌——』白老:社団法人北海道ウタリ協会 白老支部。

北海道新聞社

1993『北海道歴史人物事典』札幌:北海道新聞社。

北海道教育庁社会教育部文化課(編)

1979年「白老民俗資料館所蔵作品目録」『昭和53年度 アイヌ民俗文化財緊急調査報告書(有形民俗文化財3)』pp7-91、札幌:北海道文化財保護協会。

満岡伸一

2003『アイヌの足跡』白老:財団法人アイヌ民族博物館(初出は1924年、白老:眞正堂)。

八幡巴絵

2021「瀬棚アイヌ 住吉平吉」『令和3年度アイヌ工芸品展 アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿』pp44-47、札幌:公益財団法人アイヌ民族文化財団。